

—スタッフ紹介—

役 職	スタッフ名
主任部長兼血液浄化センター長	重松 隆
医 長	村津 淳
副医長	和田 龍也
医 員	松本 直也
非常勤医員	大道 竜也
非常勤医員	島田 素子

—概要—

腎臓内科の主たる業務は、大きくは腎臓内科領域と血液浄化領域の二つに分けられる。

腎臓内科領域では糸球体腎炎や慢性腎臓病（CKD）、重症高血圧症、糖尿病性腎臓病、薬物性腎障害、ネフロゼ症候群、うっ血性心不全や保存期治療可能な急性腎障害（AKI）に対する治療が中心で、患者同意のもとに可能なかぎり経皮的腎生検を施行して確定診断をつけ、末期腎不全への進行を阻止するため、降圧剤やステロイドや免疫抑制薬を駆使して治療を行っている。大阪府泉州地域では腎生検が可能な唯一の施設である。COVID-19蔓延により、検診機会の減少などから2020年から腎生検数は極端に減少していたが、2022年度の件数は48件と回復しつつある。CKD患者に対しては、透析導入を遅らせるよう外来において血圧のコントロールや食事療法、体液管理などを行う。

一方、血液浄化領域に関しては、末期腎不全患者に対して合併症のない適切な時期での腎代替療法導入を心がけている。主として血液透析療法については血液浄化センターにて血液透析療法を始め診療を行っているが、最近では腎臓内科が主科の患者より、院内入院の他科の症例が過半数を占めるようになり、共同運営部門の色彩が強くなりつつある。他院での維持透析患者の併存症や合併症治療による当院への腎臓内科以外の入院患者の対応を行っている。特に重症の急性腎障害（AKI）は救命診療科、心臓血管外科、循環器内科などの症例が多い。COVID-19蔓延にもかかわらず症例数は徐々に増加しつつある。このように、腎臓内科はさまざまな合併症に関しては他診療科と連携をとり治療を行っている。

血液透析患者において最も重要なバスキュラー・アクセス（VA）に関しては新規の自己血管内シャント（AVF）造設から人工血管（AVG）移植、VAトラブルに対する再建術（AVF,AVG）や経皮的血管形成術（PTA）まですべて腎臓内科で施行しており、多くは血管外科ないし泌尿器科の外科系医師による作成手術や管理が多い中、実際に透析医

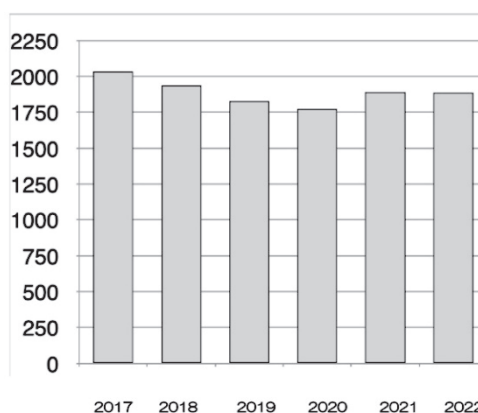
療に直接携わる腎臓内科によるバスキュラー・アクセス（VA）作成管理を行っている施設は、大阪府内では稀で医療機関は極めて珍しく貴重な施設となっている。他院から紹介されるVAトラブルの症例に対しては迅速な対応を心がけており、時間外であっても直ちにPTAや手術を施行している。2022年度のVA手術実績は下記である。透析用カテーテル（短期型、長期型）も必要に応じて当科で挿入しているが、患者高齢化により徐々に選択例が増えつつある。2022年度の長期留置カテーテルは17件であった。透析以外の血液浄化療法に関しての症例数は多くないが、血症交換療法（単純血漿交換やLDLアフェレシス）も施行して治療を行っている。透析室以外でもICUにおいて急性腎障害を合併した重症患者に対して持続的緩徐血液浄化療法を施行している。腎臓だけに止まらず、さまざまな合併症を有した患者に対して、他診療科と連携して血液浄化療法を施行しながら全身管理を行い治療にあたるのが当科の特色である。

—実績—

腎臓内科全体としては、新入院数が2022年度は212名と維持し、平均在院日数も2022年度は20.8日と短縮を維持した。これに伴い、稼働額も2020年度の285,291千円・2021年度は331,864千円に比べても、2022年度は337,217千円と増加した。

腎臓内科における手技関連（2022年4月～2023年3月）

全手術手技	290
・新規バスキュラーアクセス（VA）作成 および再建	68
・経皮的内シャント拡張術・血栓除去術	222
経皮的腎生検	48



血液浄化センターにおける血液透析件数の推移

—今年度の成果と反省点—

今年度もCOVID-19の蔓延のために、一般住民において健診受診数が大きく落ち込んだ。その結果、たんぱく尿や血尿等にての紹介患者受診数が落ち込んだ。逆に言うと生命予後に直結する血液浄化療法が必要となる急性腎障害例や末期腎不全による透析療法導入例などは大きな影響は見られず、かえって増加する傾向すら見られた。

人間的に、根木茂雄部長が2021年度途中にて退職となったのは当科にとって大きな痛手であり、その影響は患者数の減少など顕著な影響が認められた。しかしながら、臨床的には満足できる1年であったが、学会発表や治験・臨床研究など学術的な成果に関しては十分とは言えなかった。

ただし2021年度には研究実績等は全くないに等しい状況であったが、2022年度は少し業績が出てきている。具体的には別項を参照されたい。

—来年度への抱負—

泉州地区の透析導入を減らすため近隣の先生と連携してCKD患者の治療を積極的に行い、紹介患者数の増加に努力したい。臨床だけでなく治験獲得や研究の面を充実させ、研究会や学会発表を行っていききたい。その成果としての原著や総説等の執筆も行う。